

**(仮称)総合ミュージアムの整備にあたって
の基本的な考え方(たたき台)として言いたいこと**

—自然史分野を中心に—

佐藤理夫

1 自己紹介

2 博物館の見方考え方

3 私が博物館でやってきたこと

4 その他

1 自己紹介

昭和32年(1957) 函館で出生

昭和50年(1975) 受験に失敗し、浪人を記に、環境問題に目覚める

昭和51年(1976) 帯広畜産大学に進学

昭和52年(1977) 大学2年次にゼニガタアダラシに出会い、以後、野生動物の調査・研究を志す

昭和53年(1978) 卒論にカラスの研究を選んだことで、鳥類研究に方向転換

平成3年(1991) 函館市教育委員会学芸員（自然科学担当）として市立函館博物館に勤務

平成29年(2017) 函館市教育委員会市立函館博物館を退職、再任用

令和2年(2020) 函館市教育委員会市立函館博物館の再任用終了

現在、函館山を通過する鳥類の渡り鳥、主にルリビタキを中心に調査・研究を実施。

2 博物館の見方考え方

博物館とは

博物館法によれば

「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関のうち、登録を受けたもの

日本における、博物館法で規定された博物館は、以下の通りである

- 「登録博物館」 → 都道府県教育委員会が登録 → 館長・学芸員必置
- 「博物館相当施設」 → ① 文部科学大臣が指定(国or独立法人)
or ② 都道府県教育委員会が指定(①以外)
→ 学芸員に相当する職員必置
- 登録又は指定を受けていない「博物館類似施設」 → 制限なし

4 函館の博物館

(2) 博物館の今 収蔵資料

SARANIPNo.15収蔵資料概数一覧(令和5年3月31日現在)

分類	件数	割合	点数	割合
博物館史	455件	0.7%	1,709点	0.2%
地質鉱物	2,036件	3.2%	2,936点	0.4%
植物	10,335件	16.5%	10,358点	1.5%
動物	11,139件	17.8%	24,288点	3.5%
考古	11,527件	18.4%	585,117点	84.7%
歴史	6,632件	10.6%	23,636点	3.4%
民俗	7,465件	11.9%	21,825点	3.1%
民族	6,405件	10.2%	12,419点	1.8%
美術工芸	6,751件	10.8%	8,134点	1.2%
合計	62,745件	100.0%	690,422点	100.0%

菅原コレクション

菅原繁蔵は、1930年代から1960年代にかけて、樺太・北海道・東北地方で教員をする傍ら植物分類学者として、3万点を超える植物を採集し、分類整理を行ないました。当時の樺太・北海道の植物相を考える上で貴重な資料です。1969年（昭和44年）、このうち約1万点が当館に寄贈され、「菅原コレクション」として所蔵資料に加わりました。

森武コレクション

森武寅雄は、学校在職中の1930年（昭和5年）から20余年にわたり津軽海峡の海藻について研究し、その間140種におよぶ海藻を採集しました。大正期以前には、津軽海峡の海藻研究は盛んに行われていましたが、昭和期以降になると、研究者が減少していきました。そのため、この海藻コレクションは、昭和期の海藻を収集した貴重な資料となっています。

高川コレクション

高川金次は、北の貝類をはじめとするわが国を代表する貝類研究の第一人者でした。高川氏は北洋に出漁するトロール船の通信士であった1960年（昭和35年）から、船上で見た網にからまる北の貝類の魅力に取り憑かれ、北洋の貝類の収集に努めました。当時、北の貝類の調査研究が進んでおらず、氏の採集する貝類は収集した標本の記録の正確さと相まって、北の貝類研究の基礎を築きました。

昆虫コレクション

函館昆虫同好会、春山昌夫、松本泰和から寄贈された資料を中心とするコレクションです。

春山昌夫は、自然科学資料が五稜郭分館にあった昭和30年代に、分館の2階に春山昆虫展示室を設けるなど博物館事業に尽力し、松本泰和は、各地の検疫所勤務の傍ら、赴任地で、蝶類を含む膨大な数の昆虫類を採集しました。これら両氏の資料に函館昆虫同好会から寄贈された資料を加え、地域の貴重な昆虫コレクションを形成しています。

岡田普理衛コレクション

塚本角次郎コレクション

明治期の魚類コレクション

博物館史コレクション

植物コレクション

イトウ



セイウチ (♂)



イトマキエイ (♂)



シャコガイ



ウミカラムツ コシカマツ科
海綿動物
ウミカラムツは、日本固有種で、北海道から沖縄まで分布しています。ウミカラムツは、海綿動物の一種で、骨格が石灰質で硬く、潮間帯から浅海域に生息します。ウミカラムツは、海綿動物の中で最も大きな種の一つです。

オウムガイ
オウムガイ科
オウムガイは、海綿動物の一種で、殻が石灰質で硬く、潮間帯から浅海域に生息します。オウムガイは、海綿動物の中で最も大きな種の一つです。

メロンボラ
エノバイ科
メロンボラは、海綿動物の一種で、殻が石灰質で硬く、潮間帯から浅海域に生息します。メロンボラは、海綿動物の中で最も大きな種の一つです。

サザエ
サザエ科
サザエは、海綿動物の一種で、殻が石灰質で硬く、潮間帯から浅海域に生息します。サザエは、海綿動物の中で最も大きな種の一つです。

オーロラニシキガイ
イタヤガイ科
オーロラニシキガイは、海綿動物の一種で、殻が石灰質で硬く、潮間帯から浅海域に生息します。オーロラニシキガイは、海綿動物の中で最も大きな種の一つです。

アカサンゴ
サンゴ科
アカサンゴは、サンゴの一種で、赤い色をした枝状の構造をしています。アカサンゴは、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

アカヤギ
ヤギ科
アカヤギは、サンゴの一種で、赤い色をした枝状の構造をしています。アカヤギは、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

ヒダベリハナガタサンゴ
オオトザサンゴ科
ヒダベリハナガタサンゴは、サンゴの一種で、波状の縁を持つ大きな塊状の構造をしています。ヒダベリハナガタサンゴは、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

ダイノウサンゴ
キクメイシ科
ダイノウサンゴは、サンゴの一種で、大きな塊状の構造をしています。ダイノウサンゴは、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

ミネフジツボ
フジツボ科
ミネフジツボは、サンゴの一種で、大きな塊状の構造をしています。ミネフジツボは、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

ヤギ類の骨軸
ヤギ類の骨軸は、ヤギの骨の一種で、赤い色をした枝状の構造をしています。ヤギ類の骨軸は、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

クダサンゴ
サンゴ科
クダサンゴは、サンゴの一種で、大きな塊状の構造をしています。クダサンゴは、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。

ヤギ類の骨軸
ヤギ類の骨軸は、ヤギの骨の一種で、赤い色をした枝状の構造をしています。ヤギ類の骨軸は、熱帯海域に生息し、サンゴ礁の形成に重要な役割を果たしています。



函館の自然史年表（1）

- 嘉永5年(1852) ○マキシモヴィッチ（1827～1891），「ディアナ号」で世界周航の旅
- 嘉永6年(1853) ⑥ペリー浦賀に来航
⑦ゴシケヴィッチ（1814～1874），プチャーチン提督の通訳として長崎へ
- 嘉永7 /
- 安政元年(1854) ①14 ペリー，再度江戸湾外に来航
④15 ペリー，箱館来航。連日港内を測量
○ペリーに随行の軍医モロー，通訳ウィリアムス，記録係ハイネ等，鳥類，魚類，貝類，藻類などを採集
⑧30 ロシア船「ディアナ号」，箱館入港
⑪ゴシケヴィッチ乗船の「ディアナ号」，沿海州から下田への途中箱館に寄港
- 安政2年(1855) ⑦ゴシケヴィッチ，帰国途中千島列島海域で英国軍艦に拿捕され捕虜となる→'56④母国へ帰還。
③1 日米和親条約にもとづいて箱館を開港
- 安政3年(1856) ○ペリー『日本遠征記』発刊

函館の自然史年表（2）

安政4年(1857) ○ゴシケヴィッチ，橘耕斎と共著で日露辞典『日魯通言比考』出版，デミドフスキー賞受賞

○ブラキストン，1857～58 英国パリサー探検隊に加わりカナダへ

安政5年(1858) ⑩ゴシケヴィッチ，箱館駐在初代ロシア領事として家族と共に来函。アルブレヒトも，ロシア領事館付医師として来箱

⑫ロシア病院を開設，アルブレヒトが治療に当たる

○アルブレヒト，箱館付近の自宅で気象観測

安政6年(1859) ○英国のダーウィン(1809～1883)『種の起源』を著し，〈進化論〉を説く

○モース(1838～1925)，〈ハーバード大学〉のアガシ教授(1807～1873，動物学者)により，助手兼学生に採用される。アガシ教授，〈進化論〉に反対。同大学グレー教授(1810～1888，植物学者)は支持

○マキシモヴィッチ，『アムール地方植物誌』でデミドフスキー賞受賞，この賞金で来函

安政7 /

万延元年(1860) ⑨18 マキシモヴィッチ，植物研究のため来箱。須川長之助を助手に

函館の自然史年表（3）

万延元/

文久元年(1861) ⑦27 ブラキストン来箱→⑩末離箱
⑪21 マキシモヴィッチ離箱→⑫1 マ横浜に到着→⑫26 横浜を離れ長崎へ
○ゴシケヴィッチが総領事に昇格

文久2年(1862) ①4 マキシモヴィッチ，長崎に到着→④4 再び横浜に到着
⑫26 マキシモヴィッチ，長崎にもどる
○ブラキストン「揚子江の5ヶ月」で王認地理学会賞受賞

文久3年(1863) ○ブラキストン，シベリア探検を経て，再来箱

文久4/

元治元年(1864) ⑥14 新島襄，箱館から福士成豊の助力で海外脱出
⑪21 マキシモヴィッチ，横浜より帰国
○ブラキストン，蒸気機関利用による製材所開始
○ゴシケヴィッチ夫人エリザベータ，箱館で没

函館の自然史年表（4）

慶応4 /

明治元年(1868) ○ブラキストン，自宅で気象観測を開始→福士豊成，引き継ぐ

明治4年(1871) ⑧開拓使顧問ケプロン，大学校，文房，博物院の必要を建言
⑨文部省に博物局，設置○モース，〈ボーディン大学〉教授に
○マキシモヴィッチ，露都帝国科学会正会員に

明治5年(1872) ⑦23 函館出張開拓支庁は気候測量所を設置，気象観測を開始

明治6年(1873) ③1 ヒルゲンドルフ，（1839～1904），東京医学校動物学教師として来日
（→'76⑫帰国）

○モース，〈進化論〉を支持，この年アガシ教授没

明治7年(1874) ⑧ヒルゲンドルフ，海産動物の調査のため来函，ドイツ領事ハーバーの客になる

⑧11 ハーバー暗殺される

○ブラキストン，北海道の日本海ならびにオホーツク沿岸の鳥類調査

函館の自然史年表（5）

明治8年(1875) ⑧4 ブラキストン商社発行の証券に対し取引禁止を布告

○東京気象台開設

⑫ヒルゲンドルフ，帰国

○ミルン（1850～1913，地震学者）来日，'77 来函

明治10年(1877) ⑥17 モース，腕足類研究のため来日，直後に大森貝塚発見→東京大学理学部動物学教師となる

⑧ミルン，地質調査のため来函→ブラキストンらと市内貝塚調査，

「渡島の火山を訪ねて」と題し，報告論文をアジア協会機関誌に発表

⑧東京大学開設⑨開拓使函館支庁が

「鳥獣虫魚木土石の類で通常見馴れないものを採集したときは運搬前に届出ること」の公告

函館の自然史年表（6）

- 明治11年(1878) ⑤函館公園内に博物場建設を決定，物品の収集に着手
- ⑦16モースと矢田部良吉（1851～1899），
動植物調査のため来函→17海や函館山から動植物の標本を採取・研究に着手→
26小樽→⑧2室蘭→8函館→9ブラキストン邸と函館仮博物場訪問→
⑧17離函，帰京→函館仮博物場へ貝類標本や植物標本70余種，
植物標本170余種を寄贈
- ⑦16ブラキストン，鳥類標本寄贈
- ⑧ミルン，渡島地方の火山を調査→北千島の地質調査
- フェントン，石川千代松と共に蝶類採集のために来函→約1カ月かけて道南，
道央で蝶類を採集して帰京
- 小谷金蔵，旧榎法華村で海馬（セイウチ）を捕獲

函館の自然史年表（7）

- 明治12年(1879) ⑤20ブラキストンと福士成豊，鳥類剥製1,314羽を開拓使函館仮博物館に寄贈，展示
- ⑤25仮博物館開場。入場者はおよそ1万4,500人の市民が殺到。初年度4万人以上が観覧。
当時の人口は3万人台。
- ⑤北溟社より，陳列物品略目録発行
- ⑧モース，大森貝塚発見を『大森介墟古物編』で発表，帰国
- ⑧東大動物学教師ホイットマン（1842～1910）来日
- ⑪函館公園開園
- 明治13年(1880) ①ブラキストンが多年にわたり収集した鳥類の剥製函館仮博物館へ寄贈。
前年分と合わせ324種1,338羽となる
- 夏ホイットマン，動物採集のため来道→ヒル類10種を函館仮博物館へ寄贈
- ブラキストンプライヤーと共に「日本鳥類目録」を作成。アジア協会例会で発表し，
津軽海峡が日本の動物分布の境界にあたることを示唆
- 明治14年(1881) ○ブラキストン，南千島の鳥類調査

函館の自然史年表（8）

- 明治15年(1882) ②従来の気象測量所を函館測候所と改称
⑧海馬（トド）が新たに函館博物場へ展示
○モース，〈ピーボディー科学アカデミー（現ピーボディー・エセックス博物館）〉
の館長として陶器民具の収集のため来日
- 明治16年(1883) ②ブラキストン，日本アジア協会の例会で
「津軽海峡が日本の動物分布の境界線である」との学説を発表，
ミルンが津軽海峡を〈ブラキストンライン〉と呼ぶことを提案
○ブラキストン，離日
○牧野富太郎，「日本植物志図篇」第一巻第一集発刊
- 明治22年(1889) ○宮部金吾，ロシアのマキシモヴィッチを訪問
- 明治23年(1890) ⑥函館博物場に米国のスミソニアン博物館，報告書など書籍類が寄贈
- 明治24年(1891) ⑩ブラキストン，米国旅行中（59）没

函館の自然史年表（9）

- 明治29年(1896) ⑩渡島当別に男子トラピスト修道院開設
- 明治33年(1900) ⑧ジョーダン（1851～1931），北太平洋の魚類調査の途中函館に寄港→
11魚類標本調査のため函館水産陳列所訪問
- 明治34年(1901) ①14トラピスト男子修道院院長プーリエ，元町の岡田初太郎の養子となり岡田普理衛と名乗る
- 明治39年(1906) ⑥〈スタンフォード大学〉魚類学者スナイダー，北太平洋魚類調査の途中，函館に寄港
- 大正9年(1920) ⑫14トラピスト修道院長岡田普理衛収集の鉱物標本2000余点，私立函館図書館に展示
○函館要塞の内，エゾタテ山の一部を市民に開放
- 大正10年(1921) ④岡田普理衛鉱物標本，私立函館図書館で一般に公開
- 昭和7年(1932) ○『函館植物志』（山本岩亀・塚本角次郎著）を市立函館図書館から発行

函館博物館史年表

- 昭和23年(1948) 函館公園内市立図書館内に市立函館博物館発足
市立函館博物館建設期成委員会結成 募金活動を行う
- 昭和24年(1949) サイベ沢遺跡を発掘調査し小中学校で移動展示会を開催
- 昭和25年(1950) 函館公園内に博物館の建設を始めたが資金難から工事が中断
- 昭和30年(1955) 昭和29年に開催された北洋漁業再開記念博覧会に使用した建物を使い五稜郭分館が開館
- 昭和34年(1959) ○『函館山植物誌』（菅原繁蔵・小松泰造著），市立函館図書館から発行
- 昭和41年(1969) ④**市立函館博物館開館** 博物館講座を開催⑨日本博物館協会大会函館開催
- 昭和44年(1969) 北海道指定文化財旧金森洋物館を**郷土資料館**として開館
- 昭和57年(1982) 函館市**北洋資料館**開館
- 平成元年(1989) 函館市北方民族・石川啄木資料館開館
- 平成5年(1993) 函館市**北方民族資料館**と函館市**文学館**に分離・開館
- 平成19年(2007) 市立函館博物館五稜郭分館閉館
- 平成22年(2010) 箱館奉行所開館
- 平成23年(2011) 函館市縄文文化交流センター開館

昭和46(1971)年度		令和5(2023)年度	
市民講座(考古学)	5日	渡り鳥の観察会	1日
市民講座(植物)	3日	大学生と歩く西部地区再発見	1日
市民講座(美術)	1日	夏休み自由研究	8日
科学教室	1日	五稜郭探求	1日
夏期理科相談室	7日	秋の美術鑑賞会	1日
冬の公園と博物館で遊ぶ会	6日	函館公園めぐり	1日
		アイヌの技法でコースターをつくろう	2日
		体験！日本画講座	6日
		秋の自然観察会	1日
		メノココマキリをつくろう	1日
		冬休み自由研究	2日
6講座	23日	11講座	25日

令和5(2023)年度は上記のほかに郷土資料館では指定管理者が講談会や歴史講座を開催

館報サラニップ
研究紀要

昭和40年からほぼ毎年発行
平成2年から毎年発行

博物館事業の報告，資料紹介など
各種調査・研究活動の成果を発表

講座についてやってきたこと

通年講座

○自然観察入門講座—自然の物知り博士を目指そう—

・函館山を中心に植物・鳥類などを四季を通して観察を行い，自然観察の方法を学ぶとともに函館で見られる生きもの分布図を作る。

○四季の星空観測講座—函館・四季の夜空観測—

・天体観測の基礎知識を学び函館市内から見える星座・惑星を四季を通して実際の夜空を天体望遠鏡・双眼鏡などで観測し記録していく。

講座についてやってきたこと

単講座

○地域の身近な自然を調べる「春の渡り鳥を観察しよう」

- ・函館山に渡来する野鳥について観察し，その生態について解説する。

○地域の身近な自然を調べる「タンポポの分布を調べてみよう」

- ・函館市内に生息する2種類のタンポポの分布を通して，自然環境の変化について考える。

○天体観測シリーズ「春の星座観測」

- ・星座観測の基礎を学び函館で見える春の星座を天体望遠鏡などで観測

○海の自然を調べる「砂浜の漂着物を拾ってみよう」

- ・砂浜に打ち上げられた漂着物を観察することで，漂着物や海の役割について考える。

○海の自然を調べる「イワツバメを観察してみよう」

- ・イワツバメの観察を通して，ツバメ類の生息環境の違いについて考える。

○天体観測シリーズ「七夕の星を見てみよう」

- ・七夕の星と夏の星座について天体望遠鏡で観測する。

講座についてやってきたこと

単講座（生きもの編）

○地域の身近な自然を調べる「春の渡り鳥を観察しよう」

- ・函館山に渡来する野鳥について観察し，その生態について解説する。

○地域の身近な自然を調べる「タンポポの分布を調べてみよう」

- ・函館市内に生息する2種類のタンポポの分布を通して，自然環境の変化について考える。

○海の自然を調べる「砂浜の漂着物を拾ってみよう」

- ・砂浜に打ち上げられた漂着物を観察することで，漂着物や海の役割について考える。

○海の自然を調べる「イワツバメを観察してみよう」

- ・イワツバメの観察を通して，ツバメ類の生息環境の違いについて考える。

○自然おもしろミニ講座「木の葉を描く」

- ・水性サインペンで誰でも木の葉を簡単に描く方法を学習する。

講座についてやってきたこと

単講座（生きもの編） 2

○自然おもしろミニ講座「イカを科学する」

- ・〈函館市の魚〉であるイカの解剖を通して、その見方考え方について学習する。

○地域の身近な自然を調べる「函館山に戻るカラスの様子を観察してみよう」

- ・地域の身近な自然を調べる「函館山に戻るカラスの様子を観察してみよう」

○身近な自然を調べる「秋の渡り鳥を観察しよう」

- ・野外に出て木の葉を採集し、それを電子レンジを使って簡単に押し葉を作ります。併せて、押し花も挑戦する。

○自然おもしろミニ講座「押し葉・押し花作り」（変更有）

- ・〈函館市の魚〉であるイカの解剖を通して、その見方考え方について学習する。

○わくわく科学教室 親子で学ぶ「手軽な魚の解剖学」

- ・手軽に手に入る、煮干しを通して、煮干しになった魚の種類と身体の仕組みを学ぶ。

講座についてやってきたこと

単講座（天体編）

○天体観測シリーズ「春の星座観測」

- ・星座観測の基礎を学び函館で見える春の星座を天体望遠鏡などで観測

○天体観測シリーズ「七夕の星を見てみよう」

- ・七夕の星と夏の星座について天体望遠鏡で観測する。

○科学おもしろ講座「宇宙と人間（内容変更有）」（2回連続）

- ・宇宙の授業を通じて広大な〈大宇宙の構造〉をイメージし、宇宙の見方考え方を学ぶ。

○天体観測シリーズ「秋の星座と中秋の名月観望会」

- ・中秋の名月を天体望遠鏡で観測、あわせて秋の星座も見る講座。

講座についてやってきたこと

単講座（科学編）

○科学おもしろミニ講座「ドライアイスで遊ぼう」

- ・ドライアイスの役割を考えながら、どういう物質かをについて考えてみる。

○自由研究「自然のこと何でも調べてみよう2」

- ・自由研究などで集めた標本などを持ち寄り、博物館にある図鑑などの資料を参考に、名前や生態を自分で調べてみるコーナー。

○科学おもしろ講座「もしも原子がみえたなら」（2日連続）

- ・原子・分子について考えながら、併せて1億倍に拡大した模型を発泡スチロールで製作する。

講座についてやってきたこと

単講座（科学編）

○親子で学ぶ「不思議な石 石灰石」

- ・身近な岩石を調べることで、岩石・鉱物・化石についての理解を深める。

○わくわく科学教室 親子で「なき砂を作ろう」

- ・乾燥剤の一つであるシリカゲルを通じて、その原料と石英について学び、岩石・鉱物についての理解を深める。

○身近な自然を調べる 親子で行く「今金，太古の旅」

- ・道南の身近な自然に触れ，その土地の自然史に触れる旅

博物館で苦勞したこと，思いつくまま

- ・予算が付かないこと→実績が無いので予算が付きにくい。
前年比減のため，よほど認められる事業でないと，予算は上がらない。
- ・空調がないため，資料の保存に苦勞する。さらに，断熱がないため，夏暑く，冬寒い。
- ・資料の保存のため，業務用の除湿器を導入したが，音がうるさく，さらに排気熱の為，室内が高温になる欠点に気付く。→家庭用の除湿器を導入する。収蔵庫は，立地条件が良いのか，年間の温室の状態は良好。→実は，空調メーカーの職員が，お忍びで訪れた際，館の資料の状態に驚き，どのような空調をしているか尋ねられる。
- ・ちなみに，明治期の魚類標本については，北大植物園にも，同時期の標本が見つかるが，函館の方が数段状態が良いとの評価。

博物館で苦勞したこと， 思いつくまま

- ・ 上記は一部分。歴史資料には，保存状態が最悪なモノもあった。
- ・ LEDランプの導入に際し，展示室が高温になるコトを抑える目的とした。まず手始めに1階展示ケース内を変更。高温下が抑えられることが分かる。一部，設置予算を付けた時もあるが，他は館内の通常予算を使い，2011年(平成23)～2016(平成28)までに完了させる。館内の電気代予算を半減させることができた。夏の高温化を多少抑えられたが，冬期間がさらに冷え込む。→ロビに暖房室を設ける。
- ・ 函館博物館の誇れるところ→一級品の資料が多い。資料の貸し出し点数が多い。特に出版社からの資料利用許可が多い。→公共施設は無料で良いが，民間からは資料利用料を徴収するコトも必要か。

博物館の現状と課題

- ・博物館に対して，自然科学分野の評価が低いように感じる。
それは，函館博物館の設立の歴史から考えても，明らかである。
- ・歴史は重要である。箱館戦争はインパクトがあるが，その時期には，ブラキストンは，箱館にいて，箱館戦争の様子をうかがっている。
- ・その人間模様は，箱館のグローバルさを感じるのは，私だけだろうか。

博物館の将来に望むこと

- ・自然と歴史が融合した総合博物館が，函館の博物館には似合っているように思う。
- ・博物館は函館を端的に知るツールであって欲しい。
- ・市民にも観光客にも公共交通で，可能であれば定時性が高く運行頻度の多い市電沿線が望ましい。
- ・自家用車やバスで訪れる人たちのために広い駐車場が欲しい（以前，旧潮見中学校前の裁判官宿舎跡地が駐車場候補になったこともある）。
- ・旧博物館1号，2号が管理できる立地条件がより良い。